

平成 24 年度 第 1 回 石狩市文化財保護審議会 議事録

■日時：平成 24 年 7 月 7 日（土）10:00～12:10

■会場：石狩市民図書館第 1 研修室

■出席者

石狩市文化財保護審議会委員

- ・村山耀一
- ・小杉康
- ・鈴木明彦
- ・百瀬響
- ・三浦泰之
- ・加藤和子
- ・宮野裕子

事務局

- ・樋口幸廣（教育長）
- ・百井宏己（生涯学習部長）
- ・工藤義衛（文化財課長・学芸員）
- ・志賀健司（主査・学芸員）
- ・荒山千恵（主事・学芸員）

■欠席者

- ・菅原晴美（委員）

■傍聴者

なし

■議事

1. 委嘱状交付

2. 教育長あいさつ

(省略)

3. 会長・副会長の選出

委員の互選により、会長に村山委員、副会長に百瀬委員を選出。

4. 会長あいさつ

(省略)

5. 諮問 石狩市指定文化財の指定について「石狩八幡神社の手水鉢」

教育長より諮問

工藤課長より諮問内容の説明

(※配布資料「第1回文化財保護審議会資料/資料1」参照)

百瀬◆市指定文化財の新たな1点として追加するのか、それとも、すでに指定されている「石狩弁天社」の一部に含めるということですか？

工藤◆新たな7点目として考えています。

百瀬◆ということは、八幡神社に置かれていた、という経緯を重視するんですね。

工藤◆この手水鉢はなぜか八幡神社に残されていて、ずっと「八幡神社の手水鉢」として使用されてきました。

百瀬◆近代になってからの歴史を語る上で非常に興味深い。よい資料だと思います。指定に賛成です。

鈴木◆石質が不明とあるので、それはぜひ調査されるといいのではないのでしょうか。長年、野外に放置されてきたので風化が進んでいますが、石質がわかれば風化を抑えて保存する方法もわかります。また、岩石が特徴的なものであれば、産地を特定することができます。

小杉◆指定には賛成です。文化財として非常に価値があります。1つ聞きたいのですが、

指定されたら、その後、それをどのように広報していくのか、何をしていくのか教えてください。

工藤◆すでに資料館で公開しています。指定後は、資料館の広報誌などで、どのような価値があるものか、お知らせするような機会を作っていきたいと思っています。

小杉◆今後もぜひ、指定をしたらそれで終わりではなく、市民のみなさんに紹介する機会をつくっていただきたい。それによって市民の関心を高め、新たに指定すべき資料の発見につながっていくと思います。

村山◆諮問された物件が机上で議論されるだけで終わるのではなく、実際に委員が現場に行ってみるとか、その他に（良い資料が）ないか、というように積極的に求めていくことも、委員の役目ではないかな、と思います。

三浦◆1700年代という古い時代の資料は、道南を除いて北海道では残っているものが少ないです。近世期の歴史を探るのに非常に有効な資料と言えます。当時の石狩の社会、産業を示す、貴重なものであり、指定文化財とするのに賛成です。一方でまだまだ近世期はわからないことも多く、研究の余地もあるので、今後も調べられていくとよいと思います。

村山◆この手水鉢をきっかけに、広く歴史が紐解かれるかもしれないので、今の話はありがたいです。

加藤◆文化財指定については賛成です。うまく市民に紹介していただければありがたいと思います。

宮野◆指定に賛成です。市民のみなさんにわかってもらいたいと思いました。そのためには、今後詳しく調べていただくことに賛成です。

村山◆みなさんの話をうかがって、指定の方向で良いことがわかりました。この手水鉢は八幡神社で使用されていましたが、新たな手水鉢が神社に寄進されたことによって、脇に放置されることになったものでした。私たちも心配していたのですが、教育委員会で引き取ってもらえて、ありがたいと思っています。ただ、この指定の名称（八幡神社の手水鉢）でいいのでしょうか。歴史的な経緯（もとは弁天社のもの）がわかるような名称のほうが

良いのかもしれないとも思うのですが、ご意見を聞かせてください。

鈴木◆名称としては、物の名前と、存在した場所ということで付けられたと思います。物の名前だけになってしまうと、その背景などわかりづらいものになってしまうと思います。

小杉◆場所と物の名前を名称とすることは妥当かと思います。歴史的な背景を広く市民に広報していくことによって、市民が「八幡神社の手水鉢」と聞くだけでその背景・歴史まで認識できるように、長期的ですが、意識を変えていくことが大事かと思いました。

三浦◆指定の方法ですが、すでに指定されている「石狩弁天社」への追加ではなく、別に新たに指定する、というのは、どういう判断なのでしょう。

村山◆長い間八幡神社にあったことで歴史（由来）が変わってしまっているのに、弁天社に入れてしまうのは違うかと思います。かといって「八幡神社の」としてしまうと、固定化されてしまうかな、と思って、意見をうかがってみました。

三浦◆由来も兼ねて紹介できると良いと思います。

百瀬◆たとえば『旧』弁天社の…」とすれば、八幡神社に置かれていたという経緯にも誘導できるかもしれません。

村山◆ここまで出たようなご意見を、事務局のほうで吟味していただくということでしょうか。

工藤◆ご意見を整理して、次回にでも名称、指定のしかた等について、あらためて提案できるかと思います。

6. 報告 平成 24 年度文化財関係事業について

志賀学芸員より説明

(※配布資料「第 1 回石狩市文化財保護審議会」「第 1 回文化財保護審議会資料／資料 2」参照)

7. 協議 これからの石狩市郷土資料の保存・展示のあり方等について」(H23 より継続協

議)

工藤課長より、諮問の経緯について説明

志賀学芸員より、事務局のイメージについて説明

(※配布資料「第1回文化財保護審議会／資料5～7、9」「博物館グランドデザイン」参照)

村山◆石狩は3つの市町村が合併したことにより、3つの資料館がありますが、それぞれ規模や老朽化の問題、立地の問題などがあります。そこで、“ハコモノ”だけでなく、自然、文化遺産などを合わせて、総合的に活用する解決策としてエコミュージアムのようなものを想定しているわけです。

鈴木◆サテライトの1つとして考えられる望来（の地層・化石）は、大学の地質巡検等でもよく行く所です。特徴的な化石が産出することで有名なところですが。私の学生が望来小学校に理科支援で行ったとき、向こうの先生から、望来の化石が処分しようと思っている、と聞き、見てみると非常に状態のいい魚類化石でした。今、魚類化石の専門家に調べてもらっています。化石はこのようにアマチュアの方が採集したものが多く、博物館のコレクションになり、研究や教育に活用されます。このようにモノというのは博物館のベースになるもので、それを入れる収蔵庫がないということは、博物館としてはネックになっていると言えます。もうひとつ、今、ジオパーク（世界自然遺産の“地質版”）が注目されています。北海道では有珠山やアポイ岳などが登録され、観光や教育に活かされています。これらは、現地に行って実物を見る、ということが重要視されています。このように地層の露頭などに案内板を付けたりガイドが案内することで、地域の方々に知っていただく機会になるのではないのでしょうか。

村山◆化石や文献、資料など、学校や家庭などで価値がわからずに処分されてしまう前に収集するのは博物館として重要です。また、そういう中で、今までのイメージにとらわれない形で石狩らしい博物館構想をつくっていくアイデアがあれば良いと思います。

百瀬◆望来の地層・化石が世界的にも価値のあるものということなら、全国から人を集めることも可能でしょう。

小杉◆今回、新しい博物館や資料のあり方について「継続協議」という形で設定されていますが、今後、ここで話されたことが、どういう形で活かされていくのですか？

工藤◆今年度は4回の審議会を予定しており、次回（2回目）は厚田・浜益の現地視察をして、地域の方々の話を聞きたいと思っています。4回目までの協議をもとに、石狩市の博物館のプランを固めていきたいと思っています。

百井◆財源と合わせて考えていかなければならないので、すぐに何か着手できるとは言えませんが、来年度から何か着手できることをイメージして答申をつくっていただきたい、という考えはあります。

小杉◆今のご時世、大きな“ハコモノ”を造れば済む、という時代ではないし、実質的にも良くない。既存の物をできるだけ活用しながら、なおかつ市民が参加して進めることができることが大事にされます。できあがって終わりではなく、つくる過程、持続する過程をいかに持てるか、ということが今後は重要になっていくでしょう。博物館の在り方もどんどん変わってきていて、「地域まるごと博物館」というような整備の仕方も各地で進むのではないのでしょうか。基本的には、エコミュージアム的な構想をベースとして、それをいかに練り込んでいくか、という議論の方向で進めていけば良いと思います。ところで、確認しておきたいのですが、はまます郷土資料館（旧白鳥番屋）は、耐震診断は実施されていますか？

工藤◆耐震診断はやっていません。

小杉◆今後、人を多く入れるとなれば、耐震基準に沿うことが必要になってくるかと思えます。それから、「地域まるごと博物館」といっても、「地域のものは何でも地域にとっておきましょう」としただけでは意味がありません。石狩・厚田・浜益の3地域を1つの地域として、価値を見いだしていくことが必要です。歴史、自然史、文化としての地域のストーリーを見つけていって、それに見合う形の文化財、自然景観などをエコミュージアムのサテライトとして認定していくことが必要で、それは先ほどの文化財の指定（手水鉢）にも密接に関連していると感じました。

村山◆先ほど、化石・地形・景観の話がでましたが、これは新しい感覚で、重要な部分だと思います。もうひとつ、人々の生き様、たとえばニシン漁との関わりなど、生活の歴史の発掘も必要と思えます。その一方で古文書、物なども眠っているものがそのうち処分されてしまうかもしれない。こういうものの保管についてはどうでしょう？

三浦◆現地に保管していくのか、コアに収蔵庫を設けて保管・活用していくのか。収蔵というのは重要な問題かと思います。

宮野◆私は博物館が好きで、遠くに出かけたら、よく立ち寄ります。ほかの地域には素晴らしい博物館がいっぱいあるのですが、石狩にはそういうものはありません。こんなに色々な土地があるのに不思議です。また、自分で縄文土器を作ったりするのですが、そんなものを子どもたちに教えてあげたい。博物館の中にそういう実習などができる部屋があるといいなあ、と思います。

加藤◆コアとして1ヶ所に博物館の機能を集中して、まわりにサテライトを配置する、というのは非常に良い考え方だと思います。ただ、私もよく博物館に行ったり、資料館でボランティアをやっていると思うのですが、そのときに重要なのは、解説だけあっても「人」がそこに存在しなければ、魅力的なものにはなりません。博物館に「人」に会いに行って、そこで「物」を知って、そしてさらに知ろうと思うのではないのでしょうか。市民を巻き込んだボランティアはとても大切ではないかと思います。ジオパークのような場所で案内板があって、さらにそこに「人」が存在するということが、その地域を知ろうとすることにつながると思っています。

以上

議事録を確認しました。

平成24年7月13日

石狩市文化財保護審議会

会長 村山耀一